

## (6) 本神崎の祭礼にみる歴史的風致

### 1) はじめに

本神崎地区には、古墳時代に大和王権と深い関わりをもつ航海技術に優れていた海部地方の豪族の古墳である「築山古墳」(前方後円墳:国指定史跡)が築造されている。また江戸時代には熊本藩領となり、熊本藩主休憩所としても使用されていた真宗寺院「教尊寺」(県指定有形文化財)が建立された。今も教尊寺付近の旧道沿いを中心に伝統建築による建物が多く残っており、地域の祭礼はこのまちを舞台として行われている。



八幡神社拝殿

### 2) 建造物

#### 八幡神社

八幡神社は、改修碑から昭和7年(1932)以前の建築であることが分かる。本殿は一間社流造銅板葺、拝殿は入母屋造本瓦葺で千鳥破風がつき、唐破風の向拝を設ける。なお、境内には「四柱神社」もあり、その造りは、一間社流造棧瓦葺である。



八幡神社(左) 四柱神社(右)  
築山古墳(右側の山)

#### 築山古墳

築山古墳は、5世紀初めに造られたと推定される全長約90mの前方後円墳で、昭和7年(1932)に2基の石棺が発見された。現在、石棺は埋め戻されそれらの上には木造瓦葺のおおいや覆屋がそれぞれ建てられている。

#### 旧益城屋

旧益城屋は、昭和36年(1961)国土地理院による航空写真で確認できるため、それ以前の建築である。築山古墳の前にある木造二階建入母屋造本瓦葺の造り酒屋で、かつては、清酒「社頭」を製造していた。



旧益城屋

#### 教尊寺

教尊寺は、棟札より寛政3年(1791)の建築。山門は切妻造本瓦葺の四脚門で文化6年(1809)の再建である。本堂は入母屋造向拝一間付き本瓦葺で切石積基壇上に建てられている。書院・御殿は、幕末の数寄屋風書院である。



教尊寺

### 3) 活動

#### 3) - 1 八幡神社春季祭礼

言い伝えによれば、後醍醐天皇の頃、大友氏泰<sup>うじやす</sup>が八幡神<sup>かんじょう</sup>を勧請したという。江戸時代には熊本藩主細川氏の信仰が厚く、家紋の「九曜紋」<sup>くようもん</sup>の使用を許されている。明治30年(1897)の『神社慣例』によれば年に4度の祭礼があり、各家より提灯を持参し奉納していた。

八幡神社春季祭礼は4月上旬の日曜日に開催される。御神木や神楽殿などに幕としめ縄がかけられ、神楽殿や拝殿には餅が供えられている。祭りに参加する総代は皆礼服を着用しているが、かつては紋付き袴を着用したと考えられる。神輿の担ぎ手および山車の曳き手は、白い法被と股引きを身に着け、地下足袋を履いている。神社の入り口にあたる鳥居には幟が立てられ、鳥居の前に柱を2本立て、上に障子状の組み木に紙を貼って造られた屋根を吊るし、それに幕を張っている。

午前9時に宮司と総代によって神事が執り行われ、同時に神楽殿では地元神崎住民による「神崎神楽」<sup>こうざき</sup>が舞われている。その間に大(直径2m)小(直径1.5m)2つの「茅の輪」<sup>ちのわ</sup>が用意され、神職・総代・曳き手・神輿担ぎ手・参拝者の順に小さい「茅の輪」を8の字にくぐり、神輿が大きい「茅の輪」を8の字にくぐる。神輿が神社を出る



吊るした屋根



神楽殿の供え餅



神崎神楽



茅の輪をくぐる神職



茅の輪をくぐる神輿



神輿の出立



旧益城屋の前を通る神輿と獅子



山車の出立



山車上の龍が稲穂をかむ



お祓い米をもって待つ



獅子が2回かむしぐさをする



太鼓と鉦の山車



太鼓と笛の山車

時に、鳥居上に吊るしてある紙で造られた屋根が上げられる。神輿、獅子、担いだ太鼓、露払い、太鼓と笛の山車、太鼓と鉦<sup>かね</sup>の山車の順に旧益城屋前を通り、本神崎地区を巡行する。神輿の鳳凰と山車の龍には稲穂をかませており、巡行中、3軒ほどの住民より神輿や担ぎ手に向かって米が投げかけられる。この米は「お祓い米」と呼ばれており、米を投げた後に巡行行列に向かい手を合わせて行列の無事を祈る。山車の笛、鉦、太鼓は小中学生によって奏でられている。獅子は人の頭をかまず、頭の手前で2回かむしぐさをし、災いを祓う。巡行で神輿が通る通路には玄関先に提灯がかけられている家が見られる。



御神灯

神輿・山車にとともに金幣<sup>きんべい</sup>を手にした子供達が同行している。この金幣は「お旅所」で袋に詰め

たお菓子と交換される。

「お旅所」は現在神崎海水浴場となっている。お旅所の入り口には竹が2本立てられ、しめ縄がその間に渡される。海に面しており、すぐ隣に砂浜が見え、かつてはこの海に神輿が入っていたという。ここで神事が執り行われ、その間、担ぎ手や曳き手は野外にシートを敷き、ここで昼食を食べる。その後、教尊寺山門に立ち寄りながら本神崎のまちなみを通り神社へ還宮する。



金幣をもつ子供



お旅所

### 3) -2 石棺講と石棺様まつり

八幡神社の境内にある「築山古墳」<sup>つきやま</sup>は、5世紀初めに造られたと推定される全長約90mの前方後円墳で、昭和7年(1932)に未盗掘の石棺2基が発見され、石棺からは多量の副葬品と人骨4体が出土した。調査ののち、昭和11年(1936)に国の史跡に指定された。

昭和7年(1932)4月20日『豊州新報』<sup>ほうしゅうしんぱう</sup>の記事によれば石棺発見の直後より、地域住民の間では古墳被葬者「石棺様」<sup>よつはしおおかみ</sup>が信仰の対象となり、石棺が出土した後円部上に御仮屋が建てられた。4体の被葬者にお参りをする「石棺講」とよばれる祭祀がつづけられてきた。『神崎石棺様50年大祭』昭和57年(1982)によると、石棺発見から50年を記念し神事や神楽が行われている。また、同資料には、昭和27年(1952)にも20年祭が盛大に行われていたとある。

この活動を八幡神社総代会と地元自治会などからなる神崎築山古墳保存会が引き継ぎ、出土品を納めていた「宝物殿」に御神体を移し「四柱神社」とし、平成8年(1996)から10月17日前後の日曜日に「石棺様まつり」が地元のイベントとしてはじまった。石棺様まつりでは、古代衣装をまとしてパレードを行った後、古墳に登り、石



石棺出土後に建てられた御仮屋  
(昭和7年(1932)頃)  
提灯には「四柱大神」とある



石棺様まつりの際の古代衣装パレード

棺の前で参拝を行った後、四柱神社の前で神事を行う。各種の芸能大会や餅まきなどの多彩なイベントが行われ、秋の一大イベントとなっている。ただ、今も祭りの中核には「古墳被葬者石棺様を祀る」行為が位置付けられていることには変わりがない。また、保存会の方々が中心となり古墳の草刈りや清掃など古墳を大切に保存する活動がつづけられている。



四柱神社での神事

#### 4) まとめ

本神崎地区では、神輿や山車を用いた伝統的な春季祭礼がまち全体を舞台として行われる一方で、昭和初期に発見された石棺を祀るためにはじめられた祭りも既に伝統行事となって定着している。隣あった八幡神社と築山古墳を起点とする2つの祭りが本神崎地区の人々によってしっかりと受け継がれており、本地域の歴史的風致を形づくっている。



本神崎地区の歴史的風致範囲図